

平成22年 6月10日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820057

研究課題名（和文） 中世楽書の文献学的研究ならびに音楽伝承に関する研究

研究課題名（英文） A bibliographical study on the medieval “Gakusho” and a study of music tradition

研究代表者

高原 香苗（中原 香苗）（TAKAHARA KANAE (NAKAHARA KANAE)）

神戸学院大学・経営学部・准教授

研究者番号：80469270

研究成果の概要（和文）：

音楽に関する書物である楽書の生成及び音楽に関わる伝承についての研究をおこなった。楽家において、親から子へと「秘伝」が相承される際に、秘伝を記した既存の楽書をもとに新しい楽書が作られていくという、秘伝の相承とそれにともなう楽書生成の実態の一端について論文にまとめた。

また、音楽伝承に関する研究として、王権の推移にともなって、王権によって価値づけられた楽器の伝承が消長する様相について、口頭発表をし、論文にまとめた。

研究成果の概要（英文）：

I studied the creation of “Gakusho,” books on traditional court music, and music tradition. When the secret pieces of gagaku were handed down by specialist families of court musician from father to children, a new Gakusho was created based on the existing one including the secrets. I wrote a paper on the transmission of secrets and the reality of the creation of Gakusho. I also made a presentation and wrote a paper, as a study on music tradition, on the change of the tradition of musical instruments, whose value was accepted by royal authority, according to the change of power.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,310,000	393,000	1,703,000
2009年度	1,190,000	357,000	1,547,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：中世説話文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本文学・音楽史学・楽書・秘伝・説話・王権

1. 研究開始当初の背景

「詩歌管絃」という言葉が端的に示すように、古代中世の貴族に必須の教養の一つとされていた音楽については、その重要性に比して、あまり研究がなされてこなかった。

しかしながら、近年、音楽をめぐる研究は活況を呈しているといえる。国文学の立場から磯水絵『説話と音楽伝承』(和泉書院、2002)、同『院政期音楽説話の研究』(和泉書院、2003)、国史学の立場からは豊永聡美『古代中世の天皇と音楽』(吉川弘文館、2006)、荻美津夫『古代中世音楽史の研究』(吉川弘文館、2007)が上梓され、音楽史学からは福島和夫『日本音楽史叢』(和泉書院、2007)が公刊された。

また、二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム(平成 16 年度～平成 21 年度)では、音楽をめぐる種々の研究がなされ、その成果である『雅楽資料集』《論考編》《資料編》(二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム、2006)『雅楽・声明資料集』第二輯(同、2007)には、上野学園日本音楽史研究所に所蔵される楽書目録、楽書研究、楽人研究、各種索引などの成果がおさめられている。

こうした状況にあっても、研究の基礎となる楽書に関しての研究は進んでいるとはいえない。

音楽に関する研究でもっとも有効な資料となるのが、多く音楽を家業とした専門楽人の手になる楽書である。しかしながら、楽書それ自体に関する研究はほとんど進んでいない。『群書類従』・『続群書類従』などにくっつかの楽書の翻刻はなされているものの、そのうち注釈の存するのは、『教訓抄』(天福元年(1233))などほんのわずかである。

したがって、多くの楽書については、伝本研究、本文翻刻・校訂や注釈といった基礎研究を行うことが急務だと考えられる。

一方、実際の楽書がどのように生成するかといった問題に関しては、ほとんど研究がなされていない状況である。

さらに、音楽をめぐる説話の伝承に関しては、磯前掲書などで説話集や楽書などに見られる音楽説話の伝承について示唆にとむ研究がなされているものの、説話伝承と政治や文化などの背景との関わりについての研究がなされる必要があると思われる。

2. 研究の目的

(1) 『続教訓抄』の基礎研究

日本最初の総合的楽書とされる『教訓抄』の著者伯近真にならば、その孫伯朝葛によって編まれた楽書『続教訓抄』についての基礎研究を行う。

本書は、中世の説話集との関連や、中世の学問の基盤をなした朗詠注・漢籍注釈書や仏典注疏からの引文が指摘されている、中世の文化の実相をとらえるうえで重要な楽書と考えられるからである。

(2) 楽書の生成に関する研究

楽書の生成に関しては、『教訓抄』と同じ伯近真の手になったと思われる〔羅陵王舞譜〕と、「春日楽書」と称される伯氏に伝えられた一群の楽書(春日大社現蔵、重要文化財)との関係について考える。

〔羅陵王舞譜〕は、「春日楽書」中の楽書の成立に大きな影響を与えたと推測されるからである。

〔羅陵王舞譜〕は、伯氏に秘曲として伝えられた舞楽《羅陵王》の楽譜であるが、そこには当時の《羅陵王》に関する秘伝が集成されている。ここに記される秘説が、「春日楽書」中の楽書の生成に関わっていると推定されるのである。〔羅陵王舞譜〕と「春日楽書」を検討することにより、楽家において親から子へと「秘伝」が相承される際に、秘伝を記した既存の楽書をもとに、さらに新しい楽書が作られていくという、秘伝の相承とそれともなう楽書生成の実態について明らかにする。

(3) 音楽説話の伝承についての研究

楽書などに含まれる伝承は、音楽方面から古代中世の文化を考えるうえでは重要といえる。前掲『古代中世の天皇と音楽』では、平安時代から室町時代にいたる天皇や将軍と音楽との関わりが述べられ、音楽が政治と密接に関わっていたことが論証されている。

こうした成果と関連して、著名な琵琶の名器「玄象」など「名物」とされる楽器の伝承が、王権の推移とともに成長をとげ、または消長していく様相を明らかにする。

(4) 未紹介の楽書の発掘、紹介

全国の図書館・文庫・寺社等にはいまだ紹介されていない楽書が存在する可能性がある。そのため、これら楽書を所蔵していると思われる機関などの調査をおこない、楽書の発掘、紹介に努める。

3. 研究の方法

(1) 『続教訓抄』の伝本の収集と整理・分析

最古の伝本である曼殊院本の本文について検討するとともに、伝本の博搜・収集を行って伝本相互の関係を整理し、本文系統を明

らかにする。

(2) 秘伝の相承と楽書生成の実態の研究

狛近真撰述の舞楽譜である宮内庁書陵部蔵〔羅陵王舞譜〕と「春日楽書」中の楽書の検討により、狛氏における秘伝の相承と楽書生成の実態を明らかにする。

(3) 音楽伝承に関する研究

平安時代から室町時代にかけての日記や説話集、楽書などにみられる楽器の名器に関する記述を検討し、王権が推移するのにもなって、名物とよばれる楽器の位置づけが変遷し、それに応じて楽器に関する伝承が消長する様相を検討する。

(4) 未紹介の楽書の研究

全国の図書館・文庫・寺社等の調査をおこない、重要と思われる楽書については、内容等について検討し、その成果を発表する。

4. 研究成果

(1) 『続教訓抄』の基礎研究

諸伝本の収集・分析、曼殊院本の検討をふまえた伝本研究は、『続教訓抄』という書名以外のものにも伝本探索を広げる必要が生じたため、現在も継続中である。

成果の一部は、2008年6月に行われた第200回大阪大学古代中世文学研究会での研究発表において、『続教訓抄』伝本考」と題し、中間報告として発表をおこなった。

(2) 秘伝の相承と楽書生成の実態の研究

狛近真著〔羅陵王舞譜〕と、「春日楽書」中の楽書『舞楽手記』、『舞楽古記』との関係について考察した。

①〔羅陵王舞譜〕と『舞楽手記』

〔羅陵王舞譜〕と『舞楽手記』を比較検討し、『舞楽手記』は、狛氏嫡流の伝承者近真の死後、近真の末子春福丸への秘曲の伝授にもなって、〔羅陵王舞譜〕の楽譜をもとに作られたことを明らかにした。

この成果は、「秘伝の相承と楽書の生成 (1) —〔羅陵王舞譜〕から『舞楽手記』へ—」(『詞林』44、2008) に発表した。

②〔羅陵王舞譜〕と『舞楽古記』

《羅陵王》の演奏記録やそれにまつわる故実などを記した楽書『舞楽古記』と、〔羅陵王舞譜〕を比較検討した。

その結果、『舞楽古記』は、〔羅陵王舞譜〕の裏書をもとにして成り立っていることが明らかになった。

それと同時に、『舞楽古記』は、近真三男の真葛・その子季真へと受け継がれる真葛流の正統性を主張するものとしての意味をもつこ

とも推定した。

この成果は、「秘伝の相承と楽書の生成 (2) —〔羅陵王舞譜〕から『舞楽古記』へ—」(『詞林』46、2009) に発表した。

①②の考察により、これまで詳らかではなかった、秘事の相承にもなって既存の楽書から新たな楽書が生みだされる秘伝の相承と楽書生成の具体例が示されたといえる。

また、近真の遺した楽書を中核に、それを母胎として、狛氏及び狛氏の周辺であらたな楽書が編まれていく、南都での楽書生成の一端をも示し得たと思われる。

中世日本に特徴的な秘伝の相承という行爲と、実際の書物の作成とが分かちがたく結びついていることを明らかにした本研究は、日本文学ないしは日本音楽史、日本文化史上の重要な成果といえる。

(3) 音楽伝承に関する研究

王権の推移にもなって、名物とよばれる楽器の位置づけが変遷し、それに応じて楽器に関する伝承の消長がみられるという、実際の政治の動きと楽器伝承との相関関係を明らかにした。

平安時代から鎌倉時代後期にかけては、琵琶の名器「玄象」が天皇や院によって高く位置づけられるにもなって伝承も成長を続けていき、ついには三種の神器のうちでももっとも重視される内侍所の神鏡と同一視されるような伝承がうまれるにいたった。

ところが室町時代に至って、将軍家により笙が重視されるようになると、「玄象」説話の成長は見られなくなり、かわって笙の名器「達智門」の伝承が成長していく様相について検討した。

この成果は、2008年9月開催の第12回EAJS 国際会議(The 12th International Conference of the EAJS)において、「Instruments and Kingship: Changing Discourse of Instruments as Regalia in Medieval Japan(楽器と王権—レガリアとしての楽器と変容する伝承)」として口頭発表をおこなった。この内容にさらに検討を加えて、「楽器と王権」(『皇統迭立と文学形成』、和泉書院、2009)にまとめた。

著名な楽器に対する時代ごとの王権保持者の評価にもなって、楽器にまつわる伝承も変化するという、伝承の変容と政治との相関関係を明らかにした本研究は、日本文学ないしは日本音楽史、日本史上も価値のあるものと考えられる。

(4) 未紹介楽書の研究

大阪府河内長野市の古刹、金剛寺の聖教調査に参加し、金剛寺所蔵の楽書について調査した。

それらの楽書は、すべて未紹介のものである。これら楽書の調査検討の結果は、2009年12月に行われた第2回金剛寺聖教調査研究会において、「金剛寺聖教中の音楽資料について」として発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 中原香苗、秘伝の相承と楽書の生成 (2)
— [羅陵王舞譜] から『舞楽古記』へ—、
『詞林』、46、pp39-70、2009、査読無
- ② 中原香苗、楽器と王権、『皇統迭立と文学形成』、和泉書院、pp207-238、2009、査読無
- ③ 中原香苗、秘伝の相承と楽書の生成 (1)
— [羅陵王舞譜] から『舞楽手記』へ—、『詞林』、44、pp62-78、2008、査読無

[学会発表] (計1件)

- ① 中原香苗、Instruments and Kingship : Changing Discourse of Instruments as Regalia in Medieval Japan, The 12th International Conference of the EAJS (European Association for Japanese Studies)、2008年9月22日、Salento University, Lecce, Italy

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高原 香苗 (中原 香苗)
(TAKAHARA KANAE (NAKAHARA KANAE))
神戸学院大学・経営学部・准教授
研究者番号：80469270

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

